

## 国語

(六〇分)

(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

二十一世紀は「情報化社会」と呼ばれ、そのかたわらで「手作りの復権」が叫ばれている。だが、我々の常識では、この両者がどのように関係しているのかは、かならずしもはっきりとはしていない。それどころか、一見したところ、この両者には明白な矛盾が見えるはずだ。そもそも情報化社会とは、物流の焦点が「もの」から「情報」へと移る時代だといわれてきた。そうした時代に、昔ながらの「ものづくり」の復権を唱え、「もの」に拘る態度は、時代錯誤でしかないだろう。とすれば、「情報化社会」における「ものづくり」とは、従来とは異なった「もの」の見方を要請していることになるはずだ。今日が「工藝の危機」にあるならば、それは従来の「ものづくり」への後退や回帰によって克服できるものではあるまい。むしろ反対に、あらたな「もの」観が要求されている。この点をきちんと掘り下げておかなければ、「工藝」の将来に向けての議論は、無用な混乱に陥るだろう。では、現在の情報技術の革新にあつて、いかなる「もの」観のサツ新が課題となるのだろうか。

工藝という包括概念は、近代の産物である。もちろん工藝にひつくるめられる手工藝の各分野は古くから存在した。陶磁、染織、漆藝、金属加工、木工などの技術は「工藝」という上位概念がなくなるとも、それぞれに発展を遂げてきた。ならばなぜ「工藝」と

いう用語が生まれ、定着したのか。②タンの言つて、「工藝」は自らに内在する原理で確立された分野・領域とはみなしがたい。北澤憲昭<sup>\*</sup>ほかも指摘するように、「工藝」とは一方では明治時代以降、欧米近代の価値観に沿つて「美術」という範疇が確立されるとともに、①そこから排除された残余であり、他方では同時代以降に急速な進展を見せた工業技術・機械生産に取り込まれなかつた残余である。この二重の否定が重なりあつた部分、二重の疎外を蒙つた領分に与えられた X 的な名称こそ、「工藝」にほかならない。

こうした歴史的・社会的条件が、いまだに「工藝」にまわりついている。一方には「工藝」による一品生産の品々をも「美術」作品として認定させ、「藝術」の地位に就かせようとする、上昇志向の欲望がある。他方では手工藝による量産品に、工業技術による大量生産とは異なつた質が宿っていることを強調し、市場価値のある商品として製造・販売して利潤を収めようとする生産者志向がみえる。第三には、産業育成の立場から、商品価値や将来性のある新機軸に認定を与えようとするクラフト志向の商工上の行政施策が現れる。第四には、プロダクト・デザインという選択も数えられようか。職人として手による制作に携わるのではなく、工業生産の雛形<sup>ひながた</sup>をあくまで頭脳的に構想する、工業デザイナーへの脱皮、という方向である。二十一世紀零年代に京都を中心とする「工藝」とその周辺を実地検分する機会を得たが、その調査研究からも、これらの異なる志向が、個別の職人―作家―企業家や、工房―会社にあつて、あるいは共存し、あるいは反発しあいながら、定かならぬ方向を模索している現状が確認できた。場合によつては、生き残りのため、ハイテク産業への脱皮・変身を遂げている業種も少なくない。

こうした動きは、②ひとつの目標にむかつて収斂<sup>しゅうれん</sup>するというよりは、むしろ競合し、互いに反発して拡散しかねない傾向を示している。「工藝」は、様々な手仕事による「ものづくり」を束ねうような、統合理念とはいえず、昨今の社会条件のもとでは、工藝に属していた様々な職種は、かえつて互いに排斥しあい、ちりぢりに分岐し、解体し、自滅しようとしている。そしてこの斥力の中心に、空虚な場所が出現する。もはや今日の利潤追求の市場原理には馴染<sup>なじ</sup>まないため、放置すれば存続不可能な技能が、

れないために、これまた伝統の名に値しない。逸脱という代価なくしては、伝統を継承することはできないのだろうか。

こうして、伝統がなぜ滅びゆくものの痕跡として意識に昇るのが理解されるようになってくる。<sup>4</sup>失われてゆく手仕事の技能を惜しみ、その変質に抗う姿勢は、定義からして反時代的な選択となる。変質を拒み、保存を目指す価値観は、自らの選んだ不動の意思ゆえに、回帰に失敗し、取り残される。なぜなら、歳月を重ねまいとする意思は、歳月を重ねることで堆積し、否応なく高上げされ、移ろってゆく時代の座標軸から、おのずとハク離し、同時代の地層から置き去られ、深みへと沈殿してゆくのだから。だがそうして置き去りにされ、過去の遺物と化し、忘却の淵に沈んだものは、不意に再帰する。過去の記憶が、喪失感という名の符牒を帯び、亡霊と化して蘇ってくる。時代遅れという烙印を押されて捨て去られたはずの遺物が、遺失物という不在の姿で、現在の意識に自らの欠如を訴える。失われた技術、後継者を喪失した匠の技は、復元不可能性として、現在の職人に、無言のまま取り憑き、喪失を恨み、現在の技能の墮落ぶりを、背後から呪う。こうして伝統は、幽体と化し、亡霊として現在に回帰し、怨霊のように憑依する。

手仕事の復権とは、過去の亡霊を封じ込めた痕跡器官としての手を再発見することではないか。先人の手技を既に継承してはいない退化の跡が、現在人の手に透けて見える。だがその喪失感と裏腹に、人は自らの成熟を模索し、自らの軌跡を次の世代への失われた範例として遺贈し、舞台を去ってゆく。たしかに外在化された記憶書庫としての文化は、世代を超えて贈与され、継承されてゆく。だがその継承は喪失と表裏一体であり、遺されたものは、在ったものの残骸、遺物に過ぎないことを、人は否応なく悟らされる。ここでもまた、残された型は、生きた形の抜け殻でしかない。手仕事の継承は、知識や技能の伝授では継承できないもの、継承に馴染まないものとは何なのか、そこで欠落するものとは何なのか、を見出す契機となる。継承の営みとは、文化によってはその形骸しか伝授できない秘訣の存在を、ひとつひとつの世代が、喪失感とともに納得してゆくための、先祖供養なのだろう。<sup>6</sup>顕彰とは喪失を糊塗する後知恵でしかない。だが、喪の儀式よりほかに、失われるものを記憶に留める術はな

進むべき道を見失って路頭に迷っている。<sup>3</sup>かつての職業連関の鎖が断絶し、負の連鎖反応によって崩壊しようとしている職種がある。これらの喪失の危機にある手工業や、絶滅に瀕した職能に関しては、文化行政による保護政策が不可欠とする立場もある。逆に、生息条件を失った技法など、滅びるに任せればよい、との突き放した価値観もある。市場競争力を失った技法は、失われた過去の遺物として博物館に収め、最後の技術保持者の技は、デジタル・アーカイヴズに保存するよりほかに手立てがない。否むしろ、スーパー・コンピュータにデジタル・データとして入力保存して将来に備えれば、それでよい。無形文化財や人間国宝は、ビデオ映像で商品化すれば、それで十分とする見解もある。

だが、こうした議論は、いずれも今日の「工芸」の危機への対処療法、あるいは施策の指南にとどまっていて、より核心となる議論を却って回避しているのではなからうか。

## (中 略)

伝統とは何なのだろう。時代の趨勢に反りの合わない技能は滅びてゆく。滅んでゆくからこそ、それをボク守せねばならないとする価値観もある。と同時に、勢いを失った技能をさらに存続させるためには、失われつつある内的な推進力を補うだけの力動性を、上乘せし、付加せねばなるまい。だがこの上乘せは、必然的に、かつての伝統に新たな外皮や内容を付け加えることを意味している。同一の伝統が回帰するためには、かつての伝統にはなかった余剰を加算することが要請される。だが加算された余剰がそれとして眼に見える限りで、そこに結果するのは、異物の出現であり、変質の兆しとなる。それはすでに、同一の伝統の回帰とは呼べない逸脱を含んだ現象だろう。これは、ニーチェが永劫回帰を論じて気づいた問題だった。同一なる伝統の回帰を可能にする条件を整えると、そこに回帰したものは必然的に同一ならざるものとなる。回帰したという事実が意識される限り、その意識が純粋な回帰に対する余剰として働くからだ。その反対に、同一物の回帰は、回帰として意識されない宿命を負う。伝統は、伝統として意識される限りで、伝統を裏切っている。だが伝統として記憶されない伝統は、もはや伝統とは見なさ

い。

(稲賀繁美『接触造形論』による)

注

「工藝」の表記について……常用漢字表では「工芸」と書くが、著者の考えに従い旧字体のままにする。

\*北澤憲昭……一九五一。美術評論家。『アヴァンギャルド以後の工芸』などの著書がある。

問一 傍線①～④のカタカナの漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれの群から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

- ①が 1、②が 2、③が 3、④が 4。
- |       |                                       |         |         |         |
|-------|---------------------------------------|---------|---------|---------|
| ① サツ新 | A 摩サツ音                                | B 縮サツ版  | C 落サツ額  | D サツ虫剤  |
| ② タンの | A 最タン距離                               | B 準備万タン | C 大タン不敵 | D タン刀直入 |
| ③ ボク守 | A 親ボク会                                | B 打ボク傷  | C 水ボク画  | D ボク念仁  |
| ④ ハク離 | A 怪 <sup>もろ</sup> 佻 <sup>てう</sup> 浮ハク | B 強ハク観念 | C 実力ハク仲 | D ハク製標本 |

問二 空欄 X に当てはまる語として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

- 5。
- |      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| A 仮称 | B 実質 | C 他律 | D 複合 |
|------|------|------|------|

問三

傍線1「そこから排除された」とあるが、欧米近代の価値観に沿って確立された「美術」という範疇から「工藝」が排除されたのは、「工藝」のどのような点によるのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

- 6。
- |       |       |         |       |
|-------|-------|---------|-------|
| A 一品性 | B 著名性 | C デザイン性 | D 量産性 |
|-------|-------|---------|-------|

問四 傍線2「ひとつの目標」とは何か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

- 7。
- |                  |
|------------------|
| A 工藝の危機の解決       |
| B 工藝の機械化         |
| C デジタル・アーカイヴズの充実 |
| D 手作りの復権         |

問五 傍線3「かつての職業連関の鎖が断絶し、負の連鎖反応によって崩壊しようとしている職種がある」とあるが、これは工藝

のある職種におけるどのような特徴によるものなのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

- 8。
- |        |         |        |        |
|--------|---------|--------|--------|
| A 組合制度 | B 下請け制度 | C 徒弟制度 | D 分業制度 |
|--------|---------|--------|--------|

問六 傍線4「失われてゆく手仕事の技能を惜しみ、その変質に抗う」とあるが、その例として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

9。

- A 大量生産とは異なる付加価値を持つ産業の育成にあたり、行政が持っている主導権を取り戻すこと。  
 B 勢いを失った技能を存続させるのに新たに付加されるものなどはないという非現実的な理想を持つこと。  
 C 技術保存者の技をデジタル・アーカイヴズに入力保存し、必要に応じてビデオ映像で確認すること。  
 D 部分的に機械化されつつも手作り感を残した商品を量産していく新たな「工芸」の道を探ること。

問七 傍線5「その喪失感と裏腹に、人は自らの成熟を模索し、自らの軌跡を次の世代への失われた範例として遺贈し」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 10。

- A 職人達は、先人の技芸を継承できないが、せいぜい自分なりに研鑽を積んだということを次の世代に残したこと。  
 B 職人達は、先人の技芸を継承していないことを気にしながら、自分の技能を磨いて新たな技を後世に残したこと。  
 C 職人達は、先人の技芸を継承できずに、自分で新しい技を編み出していくが、結局その人の技しか残せないこと。  
 D 職人達は、先人の技芸を継承できなかったことをばねとして、修業したその健闘ぶりを次の世代に残したこと。

問八 傍線6「顕彰とは喪失を糊塗する後知恵でしかない」とはどのようなことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 11。

- A 死後に名匠たちを表彰することは、その人々の技芸を惜しむとともに顕彰が手遅れだったことを示していること。  
 B 無形文化財などに認定するのは、後継者がいなくなり、その技芸の継承に失敗したことごまかしであること。  
 C 伝統工芸に携わっている職人を表彰することは、消滅を一時的にくい止めるだけの付け焼き刃にすぎないこと。  
 D 人間国宝などに認定して伝統の喪失を止めようとしても、その効果や結果も得られず何の役にも立たないこと。

問九 筆者は「工芸」における「伝統」をどのようなものと考えているか。次の中から本文の内容と合致しないものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 12。

- A 伝統は時代により徐々に変化するが、継承の途上において継承の不可能なものも出現する。  
 B かつて日常生活に存在して忘れられていたものが、ふとしたことで伝統として復活してくる。  
 C 伝統の継承には付加的なものが必要であるが、その付加により以前より優れたものに変質する。  
 D 伝統を現状のままで保存しようと努めると、逆にその伝統は消滅の過程を辿ることになる。

(二) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

庭に出て、隣屋敷の蜜柑畠の、斑々と陽ざしの落ちた黄色っぽい土の面を、私の方の植えこみの隙間を透して、ちよつとしばらく眺めている。これがこの頃、私の朝の小さな日課の一つ——というのも大げさだが、何かそんな風な習慣の一つになっている。朝といっても、朝寝坊の私のことから、それはすでに陽ざしの強い九時十時、あるいはそれよりもいつそお昼といつてしまった方がいいほどの時間である。私は猿股一つの素裸で、小庭の私の菜園の前に蹲<sup>うずま</sup>って、背中いつぱいに秋の陽ざしを浴びながら、睡後の何か心身の小皺とでもいったものを、そうして焙<sup>あ</sup>りのばすのを近ごろの毎朝の小さな愉<sup>たの</sup>しみとしている。

私のその菜園は——大げさにこんな言葉を用いてみたが、実は、胡瓜が二本、茄子が三本、トマトが二本、それに小松菜の一尺四方ばかりの芽生えの疎林、それだけのほんの言葉どおりの猫額大の規模のものではあるが、夕べには泉の水を灑<sup>ま</sup>ぎ、朝にはこうしてその畔<sup>あし</sup>に躊躇<sup>ためら</sup>して暫く日光浴を楽しむ、そのありのすさびの対象としては、そうしてまた、小さいとはいえそれはまた